退職記念随筆

45年間の研究生活をふりかえる

山　根　　繁

音声学を知る

もともと大学（兵庫県立神戸商科大学，現・兵庫県立大学）で私は，経済学部で金融論を専攻していた。そのような環境で音声学に出会ったのは，当時所属していた文化部のESSでの活動がきっかけである。文化部でありながら，日々の練習は先輩からの指導を受け，まるで体育会のように厳しく，ディベイトの大会に出場したり他大学のESSとのディスカッションに取り組んだりしていた。3年生の時は，部長を拝命していた関係上，様々な大会などで英語による挨拶をすることも多く，なんとか良い発音でかっこよくスピーチが出来ないものかと思うようになった。そこで，その頃独学で勉強を始めたのが英語音声学である。

研究職か会社員か，恩師の先生方との出会い

大学4年生になり，金融論のゼミやESSの同期みんなが銀行，証券会社，商社などに職を求める中，私も一般企業に就職するつもりで就職活動も行っていた。しかし，当時アルバイトで塾の教師をしていた経験から，教員の道も良いのでは，と迷うようになった。そのような折，教職科目担当の恩師として当時，神戸商科大学（現・兵庫県立大学）の末延岑生先生に出会うことになる。末延教授の音声学に基盤を置いた授業に大いに感銘を受けた影響もあり，音声学を学ぶために大学院へ進学する道を選ぶことになった。末延先生からの勧めで，神戸市外国語大学の大学院外国語学研究科英語学専攻課程への進学を目指す決心をする。同じ研究者への道を志望していた神崎和男氏と，末延先生の授業で出会い，神崎氏と一緒に大学院進学の準備をするため，神戸大学の故・筧寿雄先生の英語学勉強会に参加させてもらった。私は無事，神戸市外国語大学の大学院に入学することができ，故・河野守夫先生（神戸市外国語大学名誉教授）に英語音声学，心理言語学の教えを請うことになる。光栄にも，筧先生，末延先生，そして私と同様，研究者の道に進んだ神崎和男先生（大阪電気通信大学名誉教授）らと，その後長年にわたり共同研究に携わることができた。

長年続いた恩師らとの共同研究

神戸市外国語大学の修士課程は，通訳の仕事で 5 ヶ月ほどアメリカに滞在した関係で 3 年間かけて修了することになる。学会へのデビューは，修士課程修了の前年 1978 年 7 月，語学ラボラトリー（LLA）学会（現・外国語教育メディア学会 : LET）の第 17 回全国研究大会だった（学会発表 : 1）。いきなり全国規模の学会での口頭発表で，大変緊張して発表したことを今でも鮮明に覚えている。その後，恩師の筧先生，末延先生，そして学兄の神崎先生との共同研究が長年続いた。毎年のように，単独研究や共同研究として，大学英語教育学会（JACET）や外国語教育メディア学会（LET）などの全国大会で口頭発表し，その成果を論文にまとめて発表することができた。

誤答分析（error analysis）

行動主義心理学に理論的背景をもつオーディオ・リンガル・メソッド（Audio-Lingual Method）が発音教育の分野でも主流を占めた 1960 年代前後の時代においては，ネイティブの発音を目指すべきという，いわゆる母語発音原則（nativeness principle）の考え方が優勢であった。その流れを受けて 1970 年代には，学習者の発音の誤りを分析し，いかにすれば母語発音の干渉から生じる発音の誤りを防ぐことができるかに研究の焦点を当てた誤答分析（error analysis）が盛んに行われていた。当時私は，主にリスニングについての研究をしていたが，その研究の時流に乗って学習者の誤聴（聞き誤り）について，誤答分析の手法を用い，恩師らと共に共同研究を行った（学術論文 : 1, 5, 8, 14）。

当時は主に，日本人英語学習者の英語リスニング時における誤聴を，音声面から分析していた。学習者は，なぜ英語が聞き取れなかったり聞き間違いをしたりするのかを，学習者の書き取る能力を分析することによって，音声学的にその理由を示そうとした。例えば，learn that を learn at と多くの学習者が書き間違えていた場合，/lɚːn(ð)ət/ の /ð/ 音が脱落し，/n/ が歯音化［n̪］したため［lɚː n̪ət］という発音になり「ラーナット」と聞こえ learn at と誤聴したのであろうと，音声学的に分析を加えた。また，I’ve ever seen を I’ve everything と書き取ったり，first of all を festival と書き取る現象から，連続した音声に特徴的に現れる「リンキング現象」が正しい聞き取りを妨げていることがわかった。当時の一連の研究から，日本人学習者は 1）文法より音を優先して聞き取る傾向があり，2）音声変化（同化現象など），3）日本語の音韻項目にない英語音，4）語と語の切れ目の判断，5）アクセントのない機能語の聞き取りが不得手などの点が明確になった（学術論文 : 1, 5, 8）。

心理言語学的研究（リスニング）

修士論文 An Experimental Study of Hesitation Phenomena（1979）で躊躇現象（hesitation phenomena）を研究テーマにしていた関係上，その後もポーズについて研究を続けた（学術論文 : 3, 4, 6, 18, 20, 22, 23）。自然な会話等の音声資料を元に，filled pause（*ah*, *ahm* 等）と unfilled pause（silent pause）の発生箇所を構文上の観点から分析した（学術論文 : 3）。また，ポーズの挿入箇所を様々に変えて英語聴解力との関連性を調べたところ，非文法的な位置におけるポーズは聴解を著しく妨げるが，phrase 単位のポーズは聴解を容易にすることがわかった（学術論文 : 4）。

この頃以降，学会の運営委員会などを通じて知り合った菅井康祐氏（近畿大学教授）らと，ポーズの長さが音声知覚に及ぼす影響を心理言語学的な観点から研究するようになる（学術論文 : 31, 33, 41）。ポーズの長さと調音速度を統制し，それらが学習者の英語リスニングに与える影響を精査した結果，1）調音速度を変えてもリスニング力に効果はなく，2）長いポーズ（450ms）は，速い発話・遅い発話とも，リスニング力の伸長に効果があったことなどが判明した（学術論文，41）。

心理言語学的研究（スピーキング）

日本人学習者の英語発話に関して，母語の発話との比較を通じて，その特徴を明確にし，コミュニケーションの観点から情報伝達能力について検討を加えた（学術論文，25, 26, 27）。51 人の日本人大学生に，絵を提示し日本語と英語でその内容を口頭で説明してもらい，その結果を情報伝達の観点から分析した。日本語での伝達情報力の高い実験協力者は，外国語の英語でもコミュニケーション能力が豊かであることが統計的に実証された。加えて，学習者の性格と外国語能力との関連性についての更なる研究の必要性を示唆した（学術論文 : 25）。

外国語学習者の発話能力についても認知面から探った。学習者の発話能力因子と情緒因子は互いに大きな影響力を持っているといわれるが，日本人の話す英語について，心理的な緊張が及ぼす影響に関して検討した。母語でも緊張しすぎると，普段ほど上手に話せなくなることがあるのは誰でも経験上知っていることである。実験協力者の心理状態を「リラックス」,「普通」,「緊張」の 3 種類にコントロールした状態で絵を見せて，それを英語で描写してもらった。実験協力者の発話はすべて CALL 教室で録音し，その結果を分析した。実験の結果，適度な緊張感は学習者に一定レベルの動機付けを与えることになり，英語の発話量が伸びるが，緊張度が高まると，さまざま躊躇（hesitation）現象がみられた（学術論文 : 26）。

明瞭性（Intelligibility）の研究

学習者や発音指導者には，以下の二つの相対する考え方が存在しているといわれている。ひとつは，目標言語の母語話者に近い発音を習得することは可能だし，それを目標にすべきだという考え方である。二つ目は，「外国語なまり」（foreign accent）があっても構わないから，わかりやすく明瞭な発音を目指すべきだというものである。前者は母語発音原則（nativeness principle），後者は明瞭性原則（intelligibility principle）と呼ばれている。前者の考えに立つ発音指導者は，学習者の発音を英語母語話者に近づけるために，発音を矯正しようとするだろう。後者の考えに重きを置く指導者は，音声指導にあまり熱心ではないかもしれない。1980 年代後半以降は，次第に明瞭性原則が重んじられるようになってきた。コミュニケーションに支障をきたさない範囲であれば，発音の多様性を容認しよういう考え方である。

その様な世界的な学会の風潮を受けて，私も明瞭性（intelligibility）の研究をするようになった（学術論文 : 16, 19, 24, 39）。英語学習者が話す英語の発音上，統語上の特徴を分類，分析し，その音声を英語母語話者が聞いて，どの程度通じるかを統計的に明らかにしようとした。日本人大学生 80 名が話した 5 分間スピーチを音声分析して，その中で日本人特有の発音上問題のあると思われる単語を含む文を 52 箇所抽出した。これを音声編集した上でアメリカ人 48 名に書き取ってもらい，その明瞭性（intelligibility）について調べた。発音上のエラーの種類（error type）の中で，「母音添加」は比較的明瞭性は高いが，「子音省略」が一番通じにくいことが指摘された（学術論文 : 24）。国際専門誌 *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* に掲載された同論文は，たびたび他の研究者からも引用して頂いた。

明瞭性については，恩師の末延先生と学兄の神崎先生と共同研究として長年行ってきた。末延先生は明瞭性原則（intelligibility principle）の考え方の持ち主で「日本人英語」でも十分通じるので，それに誇りを持つべきだと常々いわれていた。恩師である末延先生のお考えに，直接異義を唱える勇気を持ち合わせていなかったものの，私はどちらかというと，母語発音原則（nativeness principle）を支持し，学習者はできる限り「母語発音原則」を自らの目標として持ち続けることが重要だと考えている。発音改善に向けて最大限の努力をした結果，日本人のアイデンティテーが感じられる程度の多少の日本語なまりが残るのはやむを得ないが，始めから「日本人英語」の発音でよしとするのは，いかがなものかという考え方である。

ニュース英語の研究

英語のニュースを授業教材として頻繁に使用していた関係もあり，ニュース英語，特にテレビの放送英語に関する研究を行った（学術論文 : 2, 10, 21, 28, 32, 38, 42）。スピーチスタイルとしてはフォーマルな範疇に分類されるテレビニュース英語に，分節音素面とプロソディー面，

およびその他の側面において，どのような音声特徴があるのかを調べた。音声分析ソフトの *Praat* による音響分析から 1）スピーチスタイル的ではフォーマルな範疇に分類されるニュース英語でも，英語の「話しことばに」に特徴的な音声脱落，鼻腔解放，リンキング，同化は起こること，2）アンカーパーソンの発音は，英語独特の強弱のリズムが明確であること，3）低い音域のピッチは比較的安定しており，高いピッチ音域で音の高低変化を付けていること，4）日本のアナウンサーと比較すると，米国 ABC 放送のアンカーパーソンの方が，ポーズの割合が少ないことなどを示した（学術論文 : 42）。

教材開発について

ニュース英語について関心があり，教壇に立って間もない 1980 年代から，授業でもニュースを教材として使っていた。当時は，民放のニュース番組で音声多重放送によるニュースが放映されていた。そのニュースを授業の前に録音し，自分で書き取って教材として使っていたのである。これを何とか市販の教材にしたいと思い，教科書出版社に企画として持ち込んだところ，東京の大手出版社の株式会社金星堂から反応を頂いた。当時の金星堂編集部から，日本の音声多重放送ではなく，米国の 3 大ネットワークの一つ，ABC 放送局のニュースを教材にしてはどうかという提案があった。幸い ABC 放送との版権交渉も順調に進み，1987 年に *TV NEWS FROM THE U.S.A.* という教材が出版される事になる（大学用教科書 : 2）。

当時，私が勤務していた帝塚山短期大学で非常勤として教えられていた Kathleen McLoughlin 先生に，共同編著者をお願いした。ABC 放送局のニュースを教材として編集した本テキストは，シリーズ化されて，現在まで 36 年間続くことなる。私の 45 年間の教員生活の中でも，継続性のある大きなプロジェクトなので，少し大げさではあるが「ライフワーク」と言えるかもしれない。このプロジェクトが長年続いたのは金星堂の皆さまは元より，共同編著者の Kathleen Yamane（旧姓 McLoughlin）先生（奈良大学教授）のお陰であり，大変感謝している。なお，Kathy 先生とは名字が同じなので，よく間違えられるが，Kathy 先生のご主人は，私とはまた別の山根さんである。奇遇にも名字が同じで，Kathy 先生との縁を感じざるをえない。本シリーズは，最新版の *ABC NEWSROOM 2*（大学用教科書 : 41）で通算 31 冊目になる。2010 年度には外国語教育メディア学会（LET）から，本教材の開発に対して，LET 学会賞の「教材開発賞」を受賞する栄誉を頂いた。今後，何年続けることが出来るか未定ながら，ライフワークとして，この教材開発は継続したい。

教えることは学ぶこと

関西大学の 22 年間，全学の教養科目として英語を教えたり，学部や大学院の専門科目やゼミ

の授業を担当することで大きな学びがあった。全学の英語科目でリスニング・スピーキング関係の科目を担当した際には，これまで研究してきた外国語教育学の理論や知見を応用して，授業に反映することができた。例えば，英語の聞き取りのコツなどを音声学の観点から授業で説明してきた。また，単にモデル音声をリピートするだけでなく，明示的な発音指導が発音力向上に効果があるという知見に基づいて，発音について音声学的な解説を加えながら発音指導をすることができた。

学部のゼミでは「話しことばの英語」をテーマに研究指導した。毎年，ゼミ生たちは，各自の卒論（卒業プロダクト）テーマに沿って，研究発表を繰り返すことで，苦労しながら興味深い卒論を書き上げた。コロナ禍以前は，毎年3・4年生合同で食事会を開催し親睦を深めることができた。2013年度から2024年度の卒業（予定）生まで，総計48名の学部ゼミ生を送り出した。

研究科のゼミでは，6限と7限を連続して前期課程と後期課程の合同で授業を行った。学部や大学院の専門科目やゼミの授業を担当する中，院生らから学問的な刺激を受けることで，私自身の研究をさらに深めることができた。まさに「教えることは学ぶこと」である。ゼミ生らと一緒に学会で共同発表をしたり（学会発表：34, 35, 36, 37, 38, 41, 43, 47, 48, 49, 50, 51），共著論文（学術論文：36, 40, 43）を発表できたことは大きな喜びである。前期課程のゼミでは，2007年から2022年までで，24名の修了生を送り出した。また，後期課程のゼミでは，10名の修了生のうち3名（内，2024年取得見込み者1名を含む）が博士の学位を取得することができた。

たくさんのみなさんに感謝

最後になったが，これまで私の研究・教育を支えて頂いた多くの方々に感謝したい。まず，外国語教育学・音声学の道へ導いていただいた故・河野守夫先生に深い感謝の意を表したい。河野先生には私に研究者としての扉を開いて頂いた。また，長年の共同研究を通じて，研究の仕方や共同研究の楽しさを教えて頂いた末延岑生先生，一緒に切磋琢磨できた神崎和男先生，菅井康祐先生にも感謝したい。私のこれまでの研究業績を振り返ってみると，学術論文総数43編の60％に当たる26編が共著である。長年，共同研究者の皆さまのお陰で私の研究が成り立っていたといえる。

関西大学外国語学部の同僚の先生方にも大変感謝している。外国語学部には，非常に高いレベルの学識を有し，学会でも著名な先生方がたくさん名を連ねている。その様な同僚の先生方から常に学問的な刺激を受けながら22年間，自分なりに研究を積み重ねる事ができた。今後も，たまには学会にも顔を出しながら，外国語教育学の動向に追随して行きたいと，退職を前にして考えている。